天台教学における慈悲

―特に三縁の慈悲をめぐって―

濱田智宏

「慈悲」という徳目について天台大師智顗（五三八～五九七・以下、天台）は、衆生という無数の機根に応ずる仏の「はたらき」もまた無数であり、その両者を結びつけるものこそ慈悲の根本の思想であること、さらにそれが「仏から衆生へ」と捉えられがちで、衆生にとっては受動的で一方的であるだけのような見解に止まらず、両者がいかなる交渉にあるのか、という点を重層的に解釈している。

その慈悲の思想体系の中で、特に衆生縁の慈悲、法縁の慈悲、無縁の慈悲として説かれる所謂「三縁の慈悲」については、『涅槃経』や『大智度論』などの経論類に散見される徳目であるが、天台もこの思想体系を凡そ踏襲していることが『摩訶止観』などを通じて窺い知ることができる。しかしながら、例えば『法華玄義』の「十妙」にある「行妙」の「四種の四諦の慧」として十地以前の菩薩が自行として行うことが明かされる箇所に見られるように、衆生縁の慈悲や法縁の慈悲が「無縁の慈悲」の、修道過程の一端を担うと説くその考察は、天台独特の特徴的考察であるように思われる。

その点について見てみると、「四種四諦の慧」の中の「無作の四諦の慧」について天台は、諦の分別を破し、続いて空と仮の分別を破すことを観じた時、「無縁の慈悲」が二辺の苦を抜き中道の楽を与えると説くのである。さらに「無作の四諦の慧」を修める時には、「無縁の慈悲」と同時に二十五の三昧が具わることを明かし、その三昧の有り様とは二十五の有の垢を滅することであるとする。この説を基に『涅槃経』を用いて二十五それぞれの内容を説くのであるが、特に地獄の有についての例を見ると、菩薩が地獄の有に纏わる四つの垢（苦）を破すことに努め、そこに根本戒、八背捨等の定、生滅の四諦の慧、無生滅の四諦の慧、無量の四諦の慧、そして今まさに地獄の例えを用いて説かれる無作の四諦の慧を四つの垢に対応させて説き明かす。このことから、無作の四諦で説かれる慧の中には、先の三つの慧で修められた「空」や「仮」が織り込まれていることが明かされ、またそれらが無作の四諦と共にして説かれることを鑑みると、三諦に通ずる「空」「仮」であることを示していると考えられる。

菩薩が自ずからそれらの垢を破す時、それは即ち慈悲に関かる時に、「先に自ら垢無く、今他をして垢を無からしむ」と述べられるように、まずは菩薩自身が垢を無くすために三昧をもって三諦を自覚し、その三諦を用いてさらに諸々の機に慈悲によって応ずることで、機根に中道の楽を得させるのであるとしているのである。

このように無作の四諦の慧を明かす場面においては、中道の楽や菩薩のはたらきが明かされたのであるが、さらに天台は地獄を含む二十五によって定められた三昧について、その姿勢と具える功徳について改めて推検し、「三諦を具すれば則ち通じて三昧と称す」と、二十五の三昧それぞれに心の暴きを調えて心が歪むのを直し、散心することを定めるという意義があるということを確認し、二辺を遮した上で三諦を具えることこそが三昧であると解釈するのである。

天台はこれら三縁の慈悲に対して菩薩の修道である四種の四諦や三諦、三昧を用いて、それらがいかなる連関を持つのかというような様々な角度から三縁の慈悲の思想体系を明かしているのである。また、「無縁の慈悲が最高のものである」ということだけを重要視するのが今日の辞書などにも見られる意義であるが、そこに法縁と衆生縁を踏襲させ、三縁の慈悲は別々に存在することなく、修道の過程の延長に無縁の慈悲が起るということにも突き詰めて考察している点が、三縁の慈悲に対す

る天台の特徴であり、意義であるように感じられた。

（大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程）